

笹森 亨教授を偲ぶ

イリノイ大学名誉教授・日本気象学会会員笹森 亨氏が2001年4月17日イリノイ州の大学町 Urbana 市で逝去された。末期がんで、僅か40日あまり入院した後の急逝だったと和子夫人から伺った。享年71歳。私より一回り近く若く、元気いっぱいだった同氏を知る者としては、未だにそれが信じられない思いである。殊に同氏は大学退官後、それまでの研究成果や講義のエッセンスをまとめた *Statistical Mechanics of Atmospheric Turbulence: An Introduction* と題する本の出版を意図し、その大部の草稿を頂いたので、それを拝見している最中の悲報だっただけに、余計にショックだった。

同氏は1930年2月1日東京都北区で誕生し、1953年東北大学地球物理学科を卒業、故山本義一教授の指導のもとに1955年に修士、1959年に博士の学位を取得された。その後約5年間、防衛庁の研究所にて大気放射、特に地表面の反射特性や視程についての研究に従事された。1964年に渡米し、まず約2年間コロラド大学の research associate として、大気放射学の大家 Julius London と実りある共同研究を行った。そして1967年から1978年まで NCAR (National Center for Atmospheric Research) の research scientist であった。そこでは主に笠原彰博士、Warren Wasington, Robert Dickinson らと共に NCAR の第2世代大気大循環モデルの構築に大きな貢献をした。殊に、同氏による大気放射過程のパラメタリゼーションは、精度を落とすことなく2桁も計算時間を短縮するものとして高い評価を得た。同氏の溢れる才能は、大気放射の研究に止まらず、大気力学関係にも延びていった。大気境界層のモデル研究から成層圏や金星大気の循環などにいたるまで、多くの論文を発表された。これらの1960~70年代の論文には今日でも引用されるものもある。特に代表的なのが *A Linear Harmonic Analysis of Atmospheric Motion with Radiative Dissipation* である。1976-77年にはストックホルム大学の International Institute for Meteorology で客員研究員として気候力



学の研究に従事された。

1978年にイリノイ大学の気象科学教室に教授として移ってからは、大気放射学や大気境界層・乱流論などの講義を受け持つと共に、多くの大学院生の指導に当たった。研究の対象は大規模な大気運動の力学に集中され、National Science Foundation などからの研究費に支援されて、定常性プラネタリー波の力学やアメリカ中西部の気候の年々変動などについて、優れた業績を挙げられた。退官されたのが1993年である。

同氏のおだやかで、いつも周囲の人に細かく気を使うやさしい人柄は、同僚や学生の敬愛の的だった。Hospitality に溢れた方だった。家庭では2人の息子さん、1人の娘さんのよき父親であり、夫人と共に家庭菜園に励んでいた。お2人でメソヂスト教会の会員としてボランティア活動にも熱心に参加し、コミュニティにもすっかり溶け込んでいた。近所で火事があったときには、庭先のはしごを担いで、すっ飛んでいったこともあった。今となっては、ただご冥福をお祈りする他はない。

写真の女性は令嬢の Mrs Keiko Sasamorikawa で、1985年に吉崎正憲氏が撮影したものである。

(小倉義光)